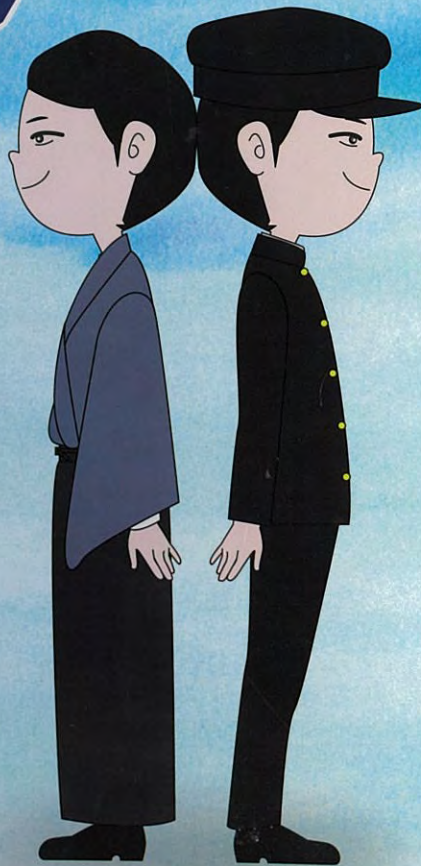
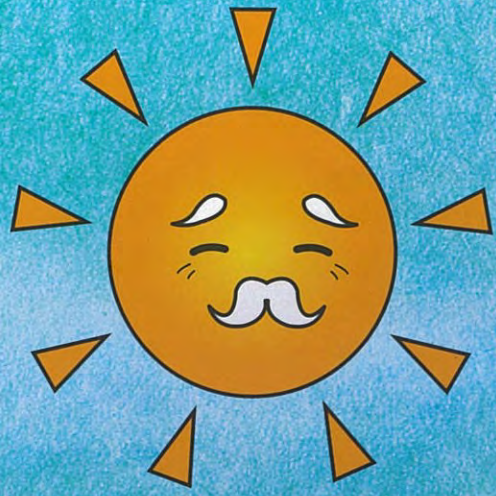




子<sup>し</sup>規<sup>き</sup>さん<sup>の</sup>  
旅<sup>たび</sup>だず







明治二十三年七月 松山にて

のぼさん、九月からは  
帝国大学というところに入  
るそうじゃのお。

すげー。  
松山のほじりじゃ。

そんなこといわれると、  
恥ずかしいのお。

大学では  
何を勉強するんぞな？

それは哲学よ！  
あしはいま、哲学に  
興味をもっとるんじや。



学校を離れてから約十年の年月がたつても、  
子規さんの夢に出てくるような学生時代は...



「あ、あ、  
なまこいわた菓子で  
いっほい食べている  
夢をみたんだ。  
幸せだったな〜。」



あなたは  
きこの夜、  
どんな夢を  
みましたか？

あしは今でも  
ときどき学校の夢をみる。  
それがいつでも試験で  
苦しめられる夢だ。

この絵本は、  
のぼさんご正岡子規さんが日本一の大学に入学してから、  
「文学」を一生の仕事にすると決心するまでの日々の物語です。

明治三十四年六月 東京にて

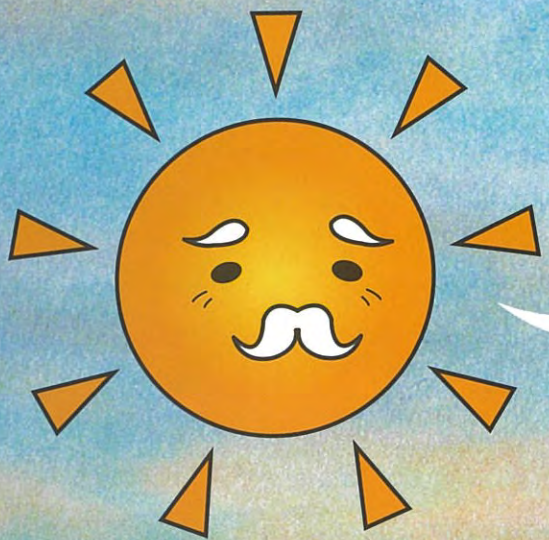




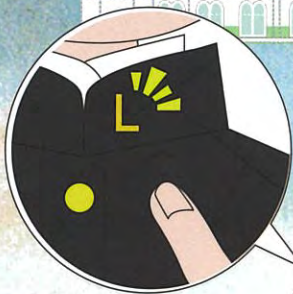
あつ！赤門だ！  
子規さんの時代から  
あったんだ。



みんな  
あこがれたもんじゃ。  
末は博士か大臣か！



あなたにも  
かなわない人が  
いますか？



明治二十三年九月、  
子規さんは四年前にてきたばかりの  
帝国大学文学部哲学科に入学。

帝大は、法科、医科、工科、文科、理科、農科  
の六つの分野に大きく分けられていたんですよ。  
学生服の襟元につけるアルファベットの「文字」  
で、どの大学生かわかったんだ。  
あしは文科大学生じゃけん、  
Literatureのしをつけとったんですよ。

子規さんと同級の学生は、たったの二十三人。  
日本全国から集まった  
とっても優秀な学生ばかりです。

帝大生は、立身出世(せ)のなかで高い地位につき、  
有名になることを目指す明治の人びとにとって、  
あこがれの存在でした。



帝大の卒業生たちには、「学士」という呼び名が与えられ、  
博士や大臣、国家公務員への道がひらかれていました。  
帝大生たちはたいへんな重圧をかかえていたようです。

哲学科には、すごい男があるんですよ。  
あしは、  
哲学を極めたいと思うとったが、  
彼にはようかなわんわ。

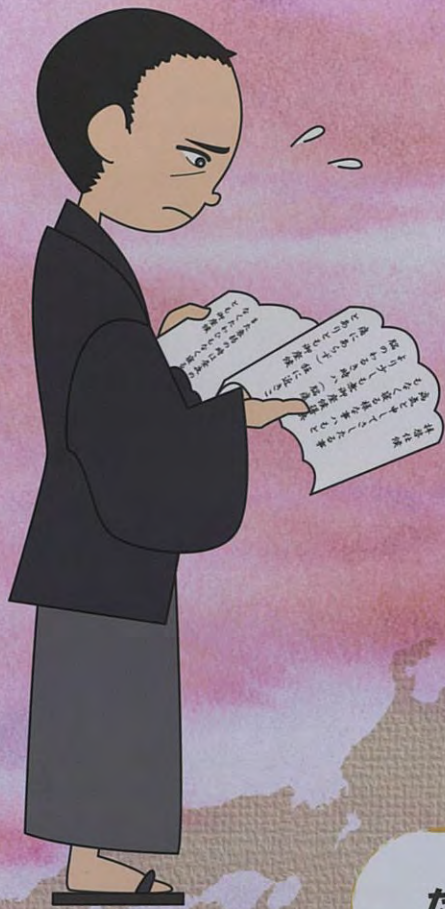


一年生の二期のイノ、  
子規さんは大学に願いを出して、哲学科から国文学部へうつりました。





お母さんで  
心配させた  
なかつたのね...



東京



国文科にうつった子規さん。  
しかし、試験がどうにも苦手で、  
大学の勉強についていけぬのも必死の様子です。

松山

松山のおじさんへ。  
あしは、三月末に  
脳病(ノイローゼ)にかかってしまつて、  
学業も何も手がつきません。  
昼も夜も関係なく寝たまま、  
おきられないこともあります。  
この前、思いきつて旅に出たところ、  
病気がだいぶよくなりました。  
このことは、母さまには  
だまっておいてくださいな。



きみの  
一生の仕事は  
何かな？

どこで学んで、まわりの人びとから  
どんな風に見られたり、呼ばれるか、  
そんなことばかりを気にする世のなか  
はかばかしい。  
一生をかけてどんな仕事をするかが、  
大切だと思ふんじや。  
見かけじゃなくて、中身が大事。  
その価値は永遠のもんじや！

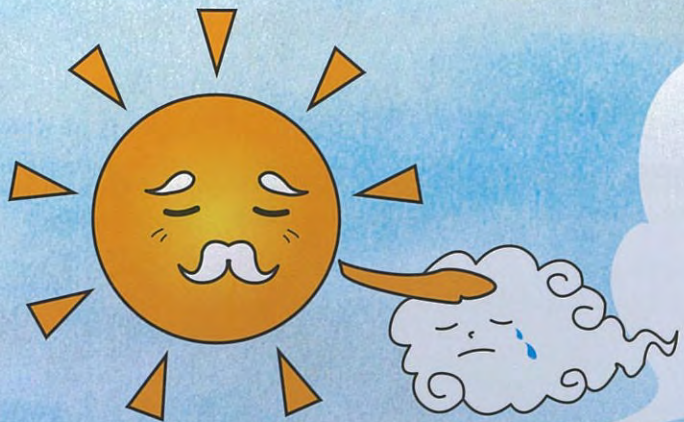
日本一の大学に入学するまえ、  
子規さんはこんなことを考えていました。

一生の  
仕事

夢







やさしい友達だなあ。  
ぼくにもこんな友達  
できるといいな。

松山や秋より高き天主閣

子規

明治二十四年、

悩める帝大生・子規さんの頭にわいて出てきた俳句のひとつです。

大学を卒業しないと  
ご飯が食べられないわけじゃないもんね。  
きみは命を大切に、  
気楽に勉強したらいいと思う。



子規さんが松山に帰っているあいだ、  
漱石さんは子規さんの再試験をしてもうけるように  
大学の先生たちに手紙を書いたり、お願いをしてまわりました。  
漱石さんのおかげで、子規さんは  
なんとか二年生にあがることのできたのです。



子規さんは、  
肺の病が  
おどろいてた  
んだよ。

明治二十四年六月、  
子規さんは一年生の最後の試験「学年試験」をひかえていました。  
この試験に合格しないと、二年生にはなれないのですが…

あしの心と頭のなかは、  
俳句でいっぱいなんじゃ。  
景色のいろと二三を散歩して、  
いい空気を吸うと、  
しぜんと俳句がわいて出てくる。  
大学の勉強はどうにも体に入ってこんけれ、  
試験前にあせって勉強せんとーっと思つて  
部屋にこもつてると、  
脳痛になつてしまふんじゃ。  
それでもがんばつて勉強しようとしたんじゃが、  
試験の途中で松山へ逃げ帰つてもうた。  
夏目君にはひどく悪いことをしたもんじゃ。

夏目君とは、英文科にかよう夏目金之助と漱石さん。  
子規さんと漱石さんは、お互いを尊敬しあう、とっても親しい友達です。





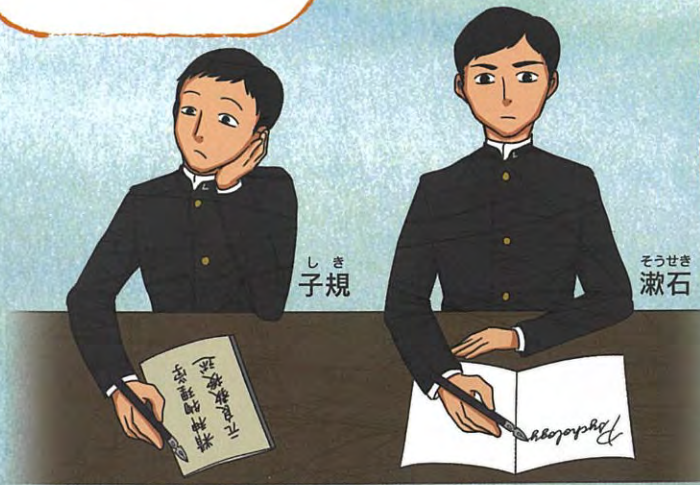
親友の漱石さんに助けってもらった子規さん。  
 その後は学校の勉強にまじめに取り組んだので、どうですか…

子規さんが漱石さんの下宿に泊まり、  
 子規さんがはじめて書いた小説『月の都』について  
 語りあった翌朝の1日…

正岡君、今日は早くと一緒に  
 精神物理学の授業に出よう。

ノートがないし、  
 買うお金もないから  
 やめておきましょう。

ノートならぼくが  
 買ってあげるから、  
 ぐずぐずしないで、  
 さあ行こう！

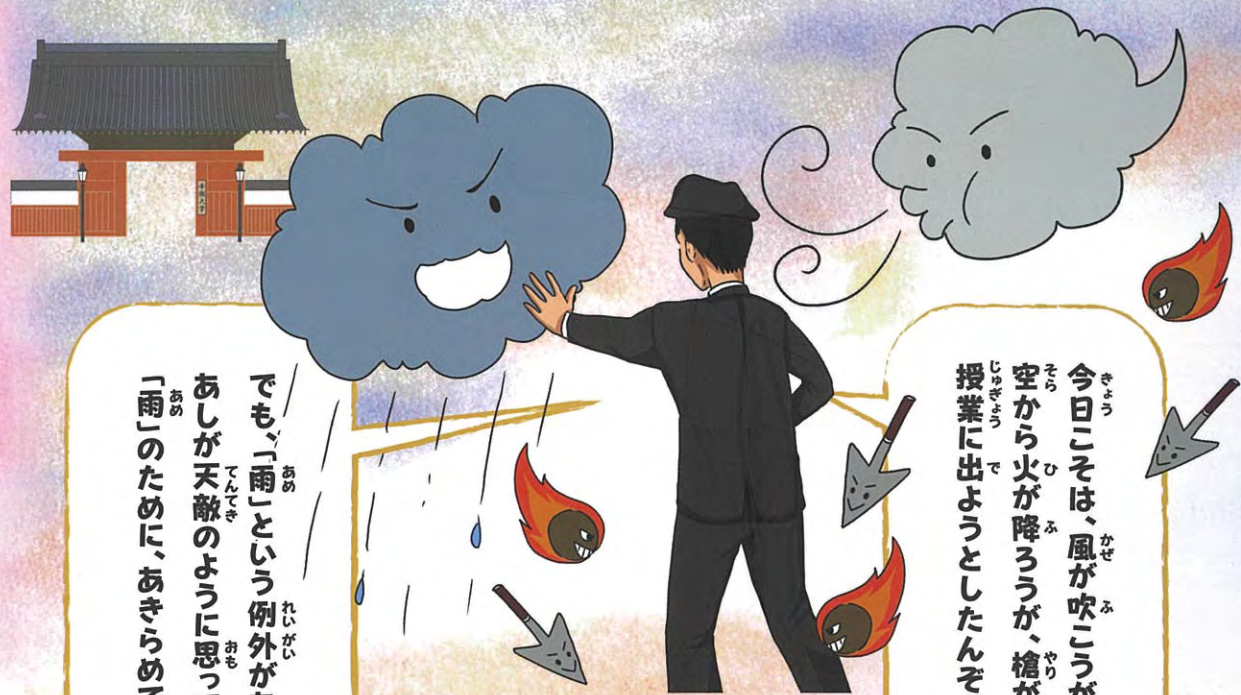


子規

漱石

今日こそは、風が吹いたら、  
 空から火が降るうが、槍が降るうが、  
 授業に出ようとしたんぞな。

でも、「雨」といつ例外があった。  
 あしが天敵のまじりに「雨」が降る  
 「雨」のために、あきらめてしまった。



「軒家を借りたい」

試験勉強に集中してのうらみのみた子規さん。

わたしも  
 おそうじを  
 したくなるわ。  
 あなたは何がしたく  
 なりますか？

誇り  
 火ともす庵や

花の春



部屋をきれいに片づけたら、気持ちがいいぞな。  
 気持ちがいいと、なんだかうきうきするぞな。  
 さあ勉強だ！  
 あれっ GUSGUSA、GUSGUSA  
 あ〜〜、俳句がしぜんと浮かんでくる〜

子規

俳句魔にやられてしまったー  
 あしはもう助かりようがない…



子規さん、  
 こんなにも  
 俳句に夢中になって  
 いたんですね。

1人の子規さんは、以前にも増して、  
 学業よりも俳句や小説など文学活動に夢中になっていました。



ZZZ



この青年はすば、  
どんな人生を  
歩むのかしら...



半年が過ぎ、また学年試験の季節がやってきました。  
明治二十五年七月八日、試験結果がまだ出ていないこの日、  
子規さんと漱石さんの姿は東京ではなく京都にありました。

夏目君、ええ月ぞな〜

まん丸の満月。京都の夜は風情があるね〜。  
学年試験を受けなかったそうだが、  
君が三年生になれることを願っているよ。

大事なんは何者になるかじゃなくて、  
何をするかだよ、夏目君。  
やっぱり、旅はええもんぞな〜

京都の旅のあと、松山での再会を約束して、漱石さんは岡山へ。  
ひるさと・松山に戻った子規さんのものごころは、  
学年試験の結果が届きました。

小生遂に大失敗を招き候  
賀すべし 用すべし  
めでたい！ 筆一本こぎつゝな。  
落筆はやはり悲しいものぞな...

水無月の虚空に涼し時鳥

子規

鳴くならば満月になければと、ぞぞ

漱石

あと二年がまんしたら、卒業できるんだ。  
つまらなくても何でも、卒業だけは  
した方がいいと思う。考え直してみてください。

たしか一年前の漱石さんは、  
「卒業しなくても生きていける」と言っていたのですが...。  
漱石はたの気持ちもゆれ動いているようですな。

なんだか辞世の俳句みたいぞな。  
ははははっ(大笑)





えっ！  
日本の大学を  
やめちゃうの？  
帝大を卒業すれば、  
いいお給料がもらえる  
お仕事につけるかも  
しれないのに…。



ぼくは、  
わからないや…。  
きみなら  
どうする？

松山にやってきた漱石さん。  
子規さんの家で松山鮎をいぢごうになりつつ、説得をいぢらみませす。

あしは、学校を  
やめついで理シやる。

なんとか  
考えなおせんか。

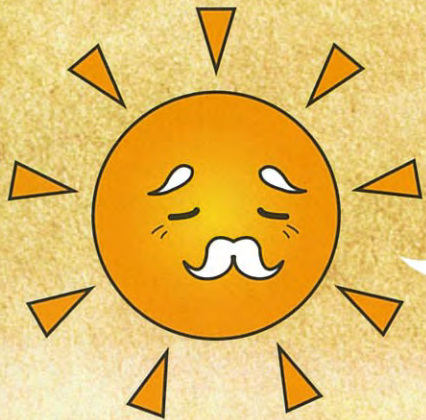
のぼさん、  
学校やめるんか…  
たまげたなあ。

松山鮎、うまいやろう。  
夏目君、きよさん、  
はようお食べや。



この場に居あわせたのは、  
松山中学にかよう高浜虚子さん。  
のちに、子規さんがめざした俳句の道を  
継ぐことになる人物です。

あしは、  
子規さんの氣持すが  
わかるような氣が  
するぞなあ…。



私も反対して  
しまつかも  
しれないわ。



親友の漱石さんが一生けんめい説得しても、  
子規さんの決意は変わりません。

子規さんの将来を期待していた  
親せきのおじさんたちの反応は…



小説で食べていけるのか？  
お金もないのに  
高級な旅館に泊まったり、  
気ままな旅をしたりして、  
いったいどういつもりぞなあ？

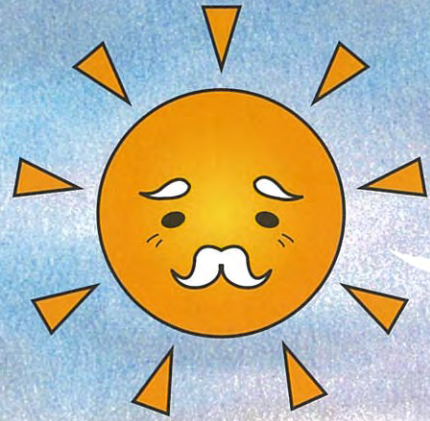
なんとか大学だけは卒業するつもりで、  
猛反対です。

なご、子規さんはこのあひ、  
どうしたのでしゅうか…。





いつも  
見守ってくださるぞ...



さあ、  
きみはどんな夢を  
みるかな？



明治二十五年、  
子規さんはついに帝国大学をやめ、  
自分の一生の仕事となる文学活動に  
専念する決意をいたしました。



あつこの道は「い」であらう！

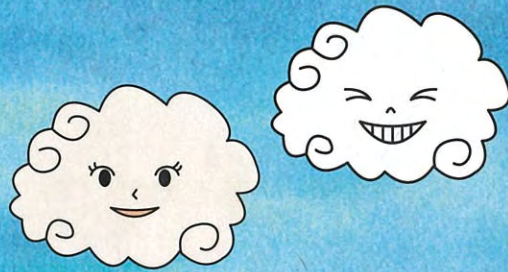
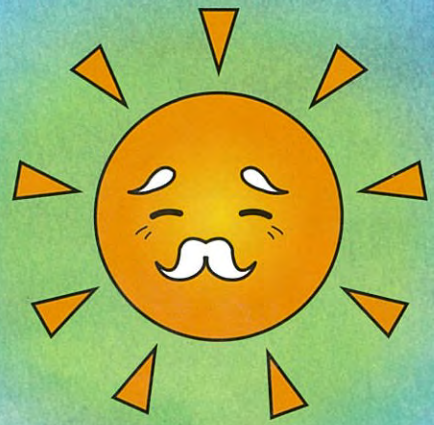
# 絵本「子規さんの旅たち」

第十回企画展テーマ展示

「近代国家制度の形成」 子規と帝国大学

企画・編集／徳永佳世(坂の上の雲ミュージアム学芸員)  
イラスト／重松摩里、田中茉莉、兵頭さき、丸岡優子  
協力／河原デザイン・アート専門学校  
制作／株式会社大広西日本  
発行日／二〇一六年二月二十二日  
発行／坂の上の雲ミュージアム





坂の上の雲ミュージアム  
SAKA NO UE NO KUMO MUSEUM